

飼葉おけの中に寝かされた救い主

今年も色々な出来事がありました。間もなくクリスマスを迎えようとしています。これ迄の人類の歴史で、数多くの偉人や聖人やヒーローなどが登場して来ましたが、そうした中で唯一、今も変わらず世界中の人々からその誕生を歓迎されているのがイエス・キリストであり、「クリスマス」として祝われています。今回は、その誕生の場面を、聖書から紹介しましょう。

○約束の地であったベツレヘム

イエスさまが生まれたのは、イスラエルのエルサレムに近いベツレヘムでした。育ての父親（イエスさまは聖霊により、処女マリヤの胎に宿られた）ヨセフの出身地であり、ローマ皇帝アウグストの「人口調査をせよ」との勅令に従って登録するために、居住地のナザレを免つて、生まれ故郷に帰ったのです。実はこの時、母マリヤは出産を前にした身重であり、本来なら旅をすべきではありませんでした。ローマ皇帝の勅令が出たために止むを得ずベツレヘムに行ったのです。しかしこれは、神さまの深いご計画によるものでした。何故なら、イエスさまが生まれる約七百年前に、預言者ミカによって、「救い主はベツレヘムで生まれる」と預言されていたのです。

○人々から締め出された救い主

身重のマリヤを気遣いながら、やっとベツレヘムにたどり着いたヨセフたちでしたが、ベツレヘムの町は、登録するために帰ってきた人々や、登録する旅の途中で立寄った人々などで、ごった返していました。このために、ヨセフとマリヤとは「家畜小屋」に泊まられ、そこでマリヤはイエスさまを産んだのです。聖書は、「客間には彼らのいる余地がなかったからである（ルカによる福音書2章）」と記しています。神様が、

人々を救うために、「救い主を遣わして下さる」ことは早くから預言されており人々は救い主が来られるのを待ち望んでいました。しかし実際には、イエスさまは人々から締め出され、家畜小屋で生まれられたのです。「ヨハネによる福音書」を著したヨハネは、次のように記しています。「彼は世にいた。そして、世は彼によってきたのであるが、世は彼を知らず」にいた。彼は自分のところに来たのに、自分の民は彼を受け入れなかった。第1章10～11節。

○飼葉おけの中に寝かされた救い主

家畜小屋で生まれたイエスさまは、布にくるまれて、飼葉おけの中に寝かされました。生まれたばかりの赤ちゃんを、飼葉おけの中に寝かせるような親がいるでしょうか。しかしイエスさまは、そうだったのです。

イエスさまはご自分のことを、「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである（マルコによる福音書10章45節）」と告げておられます。

イエスさまは、本来は雪なる御方であられながらも、わたしたちを救うために、わたしたちと同じ人間としてこの世に来て下さり、そして最も貧しい人をも救われるために、家畜小屋で生まれられ、飼葉おけの中に寝かされて下さったのです。そのイエスさまを最初に礼拝したのは、人々から「卑しい職業」として蔑まれていた羊飼いたちでした。

イエスさまは、全ての人を救って下さる救い主として、この世界に同じ人間となって来て下さったのです。感謝しましょう！



牧師 和田 忠三

見えない手に導かれて

私は一九八三年七月三十一日に、この聖中衆教会で受洗し今年で満33年になります。私が教会に行くようになったきっかけは、上の三人の子供達が「教会学校に行きたい」と言い出したことでした。5月の初めから子供達に付きついで、またよになり子供達が教会学校に出てくる間、牧師先生から個人的に誘っていただき、6月末頃に、「イエスさまに就いて行きなさい」と決心して、先程の通り洗礼を授けていただきました。

私の家は元来天理教でした。私が自身はなんとなく、「天地万物を造り、それを導いている方がおられるはずだ」という、そんな素朴な信仰のようなものを持っていました。牧師先生の導きの中で、その方がキリストの御方だと、天地創造の神様だと、何だか解ったのです。それは、何だか解ったのが「イエスの神様だ」という感じがしたのです。でも、「本当はそうだろうか」とも少し解つてから、うんとぞろぞろと近づいていきました。牧師先生から「神様のことを全部知ったら、一生かかっても無理だ」と、幼子のように、神の国を受け入れる者でなければ、そこに入るとは決してできないよと教えていただきました。思い切つて「おびん」を「洗」を受け取って、色々と「おびん」を洗つてみると、色々と「おびん」を洗

つていくうちに、神様が導いて下さっていることに気が付きました。私は子供が、この頃か本を讀むのが好きで、家にあった色々な本を讀んだのですが、その中にひとこわ面白いのがありました。小さな、分量のある本が、すてきな味のある話がかかれていたのです。元始に神天地を創造した「元始の神」に始まり、大洪水の話や、大男少年が一體で仲たがった物語など、文字は少々読みにくかったのですが、面白そうなので、読んでみました。それで、文語訳聖書でした。また、母が映画好きで、よく映画を見ながら行っていました。「天地創造」か、聖書がテーマになつてゐるものしか記憶に残つてないですね。中でも「ハイン」の最後の場面、十字架に架かれてイエスの血が流れて行くと見えた時、「ああ、この血で救われたんだ！」と心が震えたのを感じ



上野憲市郎

出します。少し大きくなって高校受験となり、滑り止めとしての私立と本命の公立を受験しました。私が簡単に合格したので、あまり簡単をせずに少し程度の高い公立に挑戦しましたが、不勉強のせいで不合格になりました。そこはミッション校で、3年間キリスト教の環境の中で通しました。この時は信じるまでには至らなかったのですが、これらの事がペーシになって、子供達の付添いで教会に行った時、直ぐに「神様を信じて行こう」と決心できたのです。神様は、30年も前から少しづつ道を備えて下さっていたのです。「見えない手」によつて、